

入居者が主体として尊重される「場のちから」に関する実証的考察**ーユニットケアにおけるエスノグラフィー調査よりー**

○ 愛知淑徳大学 氏名 黒田 由衣 (07351)

キーワード：ユニットケア・エスノグラフィー・場

1. 研究目的

現在、ユニットケアにおいては、入居者の介護度の重度化が進み、またほとんどの入居者が認知症を有しており、入居者どうしの自発的なかわりがほとんどない状況となっている。また、小規模ケアから起因する支援における困難感や、入居者の社会関係の狭まり等、ユニットケアが抱える課題等も指摘されている。2002年に「全室個室・ユニット型特養（新型特養）」が制度化されて20年が経過しているが、小規模ケアにより生じるさまざまな課題が解決されないまま、ユニットケアありきで、理念なきケアが進んでいる。

このような問題意識のもと、本研究では人やモノが多様に存在するユニット内の食堂やリビング等の共用空間に焦点をあてる。そして、人と人、人とモノとの相互作用が多様に存在する「場」が、ユニットケアのなかで生活を営む認知症高齢者の主体性の生成や喚起にどのような影響を与えているかについて検討し、「場のちから」の実際を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

これまでの認知症ケアに関する先行研究においては、いわゆる「問題行動」とされる認知症の周辺症状に焦点をあて、意図的、個別的なかわりを通して、いかに問題とされている症状や状態を改善、解決していくかについて検討されることが多かった。一方で、認知症ケア論においては、「偶然性（はずみの、ふとした、偶然の）」が内包される生活支援の必要性について言及されており、具体的に、「偶然性」が問題の解決ではなく、問題の推移、移行、転換等を生じさせる重要な契機となることなどが指摘されている。これらの議論を踏まえ、本研究では、認知症ケアにおける「偶然性」が内包されるような生活支援の可能性を考える上でも、ユニットケアの共用空間、すなわち「場」に焦点をあてることとする。

研究方法としては、2021年4月から2022年12月までの間、2期間にわたり、特別養護老人ホーム内の隣接する2つのユニット（入居者各10名）に、調査者である筆者が入り込み、エスノグラフィー調査を行った。エスノグラフィー調査におけるフィールドワーク（参与観察）とユニット介護職員へのインタビューを通して、人と人、人とモノとの相互作用が多様にあるユニット内の食堂やリビング等の共用空間が、ユニットケアのなかで生活を営む認知症高齢者の主体性の生成や喚起にどのように影響を与えているかという「場のちから」の実際について実証的に考察した。

3. 倫理的配慮

本研究における調査は、同志社大学「『人を対象とする研究』に関する倫理審査委員会」

の承認を得て実施した（承認番号：20037号）。具体的に、フィールドワーク実施前に、施設長らに文書および口頭にて調査の趣旨や目的を説明し、同意を得た。同様に、フィールドワーク時にもユニット介護職員に文書および口頭にて説明を行なった。なお、個人情報保護の観点から、調査において得られた情報に関しては、個人が特定できないように配慮した。なお、本研究に関連して開示すべき利益相反（COI）はない。

4. 研究結果

ユニットケアにおけるフィールドワークを通じた参与観察とユニット介護職員の「語り」を通して、【1】場におけるさまざまな相互作用の連続が入居者の安定した生活を支えている様子、【2】入居者同士の対等な関係からその人らしさが導かれている様子、【3】職員の存在や関係性も入居者の自発性に影響を与えている様子等が明らかになった。

具体的に【1】については、小さな、なにげないかわりの連続で“帰宅への強い思い”が落ち着き、穏やかに過ごされている入居者の様子、男性としてのプライドがさまざまな入居者や職員がいる場で支えられている入居者の様子、自発的な発語や表情の少ない入居者が、ユニット内の入居者、職員全体に見守られることにより、発語や笑顔が立ち現れる様子などが明らかにされた。【2】については、入居者どうしが“気かけ、気かけられる関係”になることにより、また周りの入居者の様子や行為をきっかけに、さらに“同じ時間、空間”をとともにすることにより、その人らしさの生成、喚起につながっていた。【3】については、職員の存在や関係性も、入居者の笑顔につながったり、関係の悪い入居者間の“緩衝材”となっている様子が示された。

これらは、職員から入居者への「する」「される」の働きかけにより生じているものではなく、共用空間という「場」が入居者の主体性を生成、あるいは喚起させている状況であり、「場のちから」が生じている状況を示すものであったといえる。

5. 考察

調査において明らかになった「場のちから」は、介護職員から入居者への意図的、個別的なかわりから生じているものではない。また、介護職員個人のコミュニケーション技術や関係構築の能力に依存するものでもなく、認知症高齢者本人の身体能力や認知症の程度、性格や理解力等に左右されるものでもない。「場」における人どうし、人とモノとの相互作用、また「場」の雰囲気や空気感により、入居者の主体性は立ち現れており、そのような場面においては、介護職員から入居者への個から個への働きかけの影響は最小限となっている。つまり、共用空間、という「場」が個人の行動の大きな要因となっている。

この「場のちから」を基盤とした認知症ケアは、小規模ケアを展開するユニットケアが抱える介護職員、入居者双方の課題を同時に克服することができ、ユニットケアにおいて展開される認知症ケアの支援の幅を広げる可能性があると考えられる。

*本研究は、黒田由衣（2024）『『場のちから』を基盤とした認知症ケアに関する研究—ユニットケアにおいて入居者が主体として尊重される支援—』同志社大学大学院社会学研究科 2023年度博士論文。の成果の一部を報告するものである。